

左の文章をよく読んで、後の設問に答えなさい。

今でこそ、当たり前になっているが、明治になって日本に輸入された様々な概念の中でも、「個人 individual」というのは、最初、特によくわからないものだった。その理由は、日本が近代化に遅れていたから、というより、この概念の発想自体が、西洋文化に独特のものだったからである。非常に込み入った話なので、詳細は巻末の「補記」に回したが、ここでは二つのことだけを押さえておいてもらいたい。

一つは、一神教であるキリスト教の信仰である。「誰も、二人の主人に仕えることは出来ない」というのがイエスの教えだった。人間には、幾つもの顔があつてはならない。常にただ一つの「本当の自分」で、一なる神を信仰していなければならぬ。だからこそ、元々は「分けられない」という意味しかなかった individual という言葉に、「個人」という意味が生じることになる。

もう一つは、論理学である。椅子と机があるのを思い浮かべてもらいたい。それらは、それぞれ椅子と机とに分けられる。しかし、机は机で、もうそれ以上は分けられず、椅子は椅子で分けられない。つまり、この分けられない最小単位こそが「個体」だというのが、分析好きな西洋人の基本的な考え方である。

動物というカテゴリーが、更に小さく哺乳類に分けられ、ヒトに分けられ、人種に分けられ、男女に分けられ、一人一人にまで分けられる。もうこれ以上は分けようがない、一個の肉体を備えた存在が、「個体」としての人間、つまりは「個人」だ。国家があり、都市があり、何丁目何番地の家族があり、親があり、子があり、もうそれ以上細かくは分けようがないのが、あなたという「個人」である。

逆に考えるなら、個人というものを束ねていった先に、組織があり、社会がある。こうした思考法に、日本人は結局、どれくらい馴染んだのだろうか？

「個人」という概念は、何か大きな存在との関係を、対置して大掴みに捉える際には、確かに有意義だった。――社会に對して個人、つまり、国家と国民、会社と一社員、クラスと一生徒、……といった具合に。

ところが、私たちの日常の対人関係を緻密に見るならば、この「分けられない」、首尾一貫した「本当の自分」という概念は、あまりに大雑把で、硬直的で、実感から乖離している。

信仰の有無は別としても、私たちが、日常生活で向き合っているのは、一なる神ではなく、多種多様な人々である。また、社会と個人の関係を、どれほど頭の中で抽象的に描いてみても、朝起きて寝るまでに現実には接するのは、会社の上司や同僚、恋人やコンビニの店員など、やはり具体的な、多種多様な人々である。とりわけ、ネット時代となり、狭い均質な共同体の範囲を超えて、背景を異にする色々な人との交流が盛んになると、彼らを十把一絡げに「社会」と括ってみてもほとんど意味がない。

私たちは、自分の個性が尊重されたいのと同じように、他者の個性も尊重しなければならぬ。繰り返しになるが、相手が誰であろうと、「これがあるままの私、本当の私だから！」とゴリ押ししようとするれば、ウンザリされることは目に見えている。私たちは、極自然に、相手の個性との間に調和を見出そうとし、コミュニケーション可能な人格をその都度生じさせ、その人格を現に生きている。それは厳然たる事実だ。なぜなら、コミュニケーションが成立すると、単純にうれしいからである。

その複数の人格のそれぞれで、本音を語り合い、相手の言動に心を動かされ、考え込んだり、人生を変える決断を下したりしている。つまり、それら複数の人格は、すべて「本当の自分」である。

にも拘らず、選挙の投票（一人一票）だとか、教室での出席番号（まさしく「分けられない」整数）だとか、私たちの生活には、一なる「個人」として扱われる局面が依然として存在している。そして、自我だとか、「本当の自分」といった固定観念も染みついていて。そこで、日常生活している複数の人格とは別に、どこかに中心となる「自我」が存在しているのかのように考える。あるいは、結局、それらの複数の人格は表面的な「キャラ」や「仮面」に過ぎず、「本当の自分」は、その奥に存在しているのだと理解しようとする。

この矛盾のために、私たちは思い悩み、苦しんできた。

（平野啓一郎『私とは何か――「個人」から「分人」へ』講談社現代新書、二〇一二年）

【設問】 傍線部にもあるように、私たちは日頃、直接顔を合わせたり、SNSなどのツールを用いたりしながら、多種多様な人々と接している。そして私たちは、人々とのそうした関わりの中で、悩み、苦しむことがある。そうしたことを踏まえ、「多種多様な人々とのコミュニケーションにおいて、あなたが工夫していることや考えていること」について、具体例を挙げながら六百字以上八百字以内で書きなさい（句読点などの記号や空白も字数に含む）。